

司馬さんの足跡を辿る 目次

- 1, はじめに
- 2, 『峠』 河井 継之助の長岡
- 3, ザビエル 布教の道
 - 1)、長崎
 - 2)、外海
 - 3)、天草、島原
 - 4)、リスボン (ポルトガル)
 - 5)、ゴア (インド)
- 4, アイルランド紀行
 - 1)、アイルランド 歴史と文化
 - ①、ケルズの本
 - ②、ケルト十字架 (ハイクロス)
 - ③、歴史 年表
 - 2)、司馬さんの旅
 - ①、司馬さん旅のトピックス
 - ②、代表的なコメント
 - 3)、私のアイルランド旅
 - ①、Blarney Castle
 - ②、Cohb Harbor
 - ③、Ring of Kerry
 - ④、Cliff of Moher
 - ⑤、Kylemore Abbey
 - ⑥、Connemara
 - ⑦、Saint Patrick Cathedral
 - ⑧、Trinity College
- 5, あとがき
- 6, 参考資料



司馬さんの足跡を辿る

2024, 5, 29 渡邊 晴雄

私は、司馬遼太郎の作品が好きである。

若かったころは、坂の上の雲 等の小説を読んでいたが、今は、『街道をゆく』に集中している。

司馬さんは 取材旅行で、日本に限らず世界を良く歩いていた。

私も旅が好きで、世界中をよく歩いた。 司馬さんの歩いた道も、目的は違ったけれどかなり歩いた。

今回、司馬さんの旅先と私の旅先がほぼ一致している処について、旅行記を書いてみようと思った。

5年前に、『島原の諸道』、『南蛮のみち』、等に関連した旅行記を書いたが、今回若干の変更を加え、アイルランドへの旅を追加して、再編成した。

1, はじめに

先日、『第27回 菜の花忌シンポジウム』が先日開催され TV で放映された。

今年度のテーマは『街道をゆく』で、パネリストは、今村翔吾、岸本陽子、磯田道夫 の諸氏。

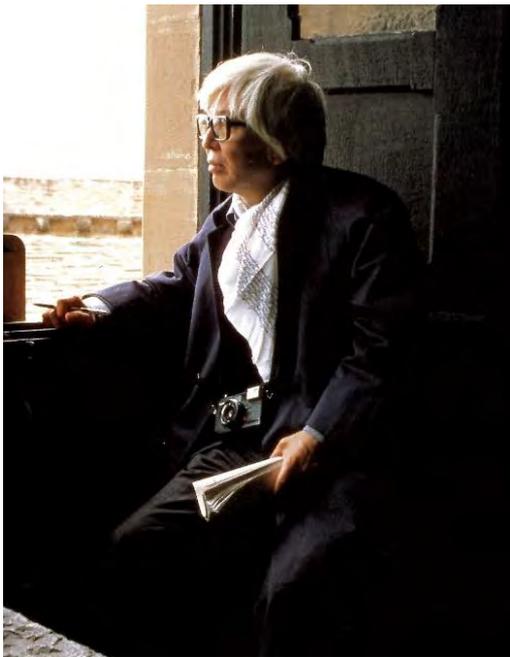
司会は 古谷和雄氏が担当で、活発な議論が展開された。

司馬さんは、“最後まで読まれていく作品は、『街道をゆく』だろう”と言っていたそうである。

私は、第4回 菜の花忌シンポジウム “『この国のかたち』を考える” が日比谷公会堂で開催された時に参加して楽しく聴講出来たことを覚えているが、時の過ぎゆく速さを、感じている。

コロナ禍が蔓延した頃から、旅行記を P&E (Photograph & Essey) の形式で書き始めている。

旅に出る前に把握しきれなかったままになっている歴史、地理その他の情報を、改めて調べる事は楽しい。 捨てずに残していた メモ、古い手帳、絵葉書 等の断片的な情報から昔を回想する事は、楽しい。



2, 『峠』、河井継之助の越後長岡、

『峠』は初めて読んだ司馬遼太郎の小説である。

私は、河井継之助が生まれ育った越後長岡で、学生生活を送った。

長岡は、戊辰戦争、長岡空襲、中越地震という大災害を被ったが、立派に復興した歴史を持つ。

継之助は 長岡藩 7 万 4 千石の家老で、耕地開拓、産業奨励、先進的武装の装備等の藩政改革を行い、「赤字財政の立て直しも行った。

戊辰戦争では、官軍から全面降伏の要求で追い詰められ、“屈辱的な生存”か“名誉ある破滅”を選択しなければならなくなり、運命の負を甘受し己の美学に殉じた究極の武士であった。

戦闘の前に小千谷の慈眼寺で、継之助と 23 才の岩村精一郎との会談が開かれたが、決裂した。

もし官軍側の指揮官が、優れた政治判断が出来る人だったら、戦いは避けられたであろう。

結果から見れば長岡は、戊辰戦争で焼野原になってしまった。継之助に対する評価は色々ある。

司馬さんは河井継之助について、最初短編小説『英雄児』を書いた。その後に『峠』が書かれたが、継之助に対する評価は異なっている。

信濃川畔にその後、司馬さんの文章により“峠の碑”が建てられた。

そこには、最終結論と思われるような文が書かれている。

“彼は商人、工人の感覚で藩の近代化を図ったが、最後は武士であることに終始した。

戦後の復興では、継之助の盟友三島億二郎が、殖産興業、文明開化、北海道開拓等で活躍した。

運命の負を感受し、歴史に向かって語りつづける道を選んだ“

長岡市制 100 年を記念して、河井継之助記念館が創られた。市民の理解の証であろう。

“米百俵”で知られている小林虎三郎も、継之助を支えた人である。

司馬さんは長岡高校創立 100 周年記念講演会で、『峠』を書く事に決めた経過を語っている。

太平洋戦争の開戦に反対しながら戦の指揮をとらねばならなかった山本五十六は、長岡出身で河井継之助を尊敬していた。二人とも藩訓の『常在戦場』の言葉を、よく色紙に書いていた。

平和を願いながらも戦わなければならなかった二人の運命は、はからずも一致していた。



長岡市 郷土資料館



3、ザビエル、布教の道

大航海時代の先駆国ポルトガルは、ブラジル、インド、等を武力とキリスト教により植民地化を行ってきた。ザビエルは、“日本人が最も知識欲が旺盛な民族である”と認識し、日本をキリスト教布教の目的地に定め、1549年に鹿児島へ上陸した。

2年3ヶ月の滞在で3,000人の信者を得たが、本国には“日本を植民地化しないように”という説得の手紙を送っていた。

司馬さんはザビエルの生真面目さと無垢な感じが好きで、“もし彼が日本に来なかったら、日本の歴史は変わっていただろう”と述べている。ザビエルが南蛮文化をもたらした事は事実。今年、『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』が世界文化遺産に登録された。

司馬さんは『街道をゆく』の中で、ザビエルとキリスト教について、多くの記述を残している。

①、長崎

長崎は好きな街で、何度となく訪ねている。

大浦天主堂は、250年の迫害に耐えながら、カトリックの信仰を守り続けた浦上の潜伏キリシタン信徒が、1865年にプティジャン神父に信仰を告白をして名乗り出るといふ奇跡が起きた教会である。国宝である。

当時は未だ禁教令下で、教会はフランス人の為に建てられていた。

入口正面のマリア像は、日本之聖母と呼ばれ、その奇跡を記念としてフランスから贈られた。どの方向から観ても非常に美しい。

この教会は又、日本二十六聖殉教者堂とも呼ばれ、1597年の秀吉による禁教令で処刑された二十六聖人の為に捧げられ、殉教地西坂に向けて建てられている。



フランシスコ・ザビエル



日本之聖母

②、外海

司馬さんは遠藤周作さんと親密で、よく正月を一緒に京都ホテルで過ごし、語り合っていた。キリスト教については、遠藤さんが先生の立場だったのであろう。

私は遠藤さんのキリシタン殉教を問いかけた『沈黙』を読んだとき、激しい衝撃を受けた。遠藤さんは長崎の十六番館で“足指の痕で黒ずんだピエタの踏み絵”を見て、それが『沈黙』を書くモチベーションになったと語っている。

『沈黙』はキリシタンの殉教を問いかけた画期的な作品である。

尊敬するフェレイラ神父が激しい弾圧で棄教したという噂を聞き、それを確かめる為に日本へ潜入したロドリゴ神父は、キリシタン信徒が拷問を受け殺されていくのを目撃する。彼は神に祈り、神に問いかける。“あなたは何故沈黙を続けているのですか？”と。彼も捕らえられ、拷問されているキリシタン信徒を見殺しに出来ず、自ら踏み絵に足をかける。その時初めてロドリゴは、これまで沈黙していたキリストの声を聞く。

“踏むがいい。お前の足の痛さは、この私が一番よく知っている”と

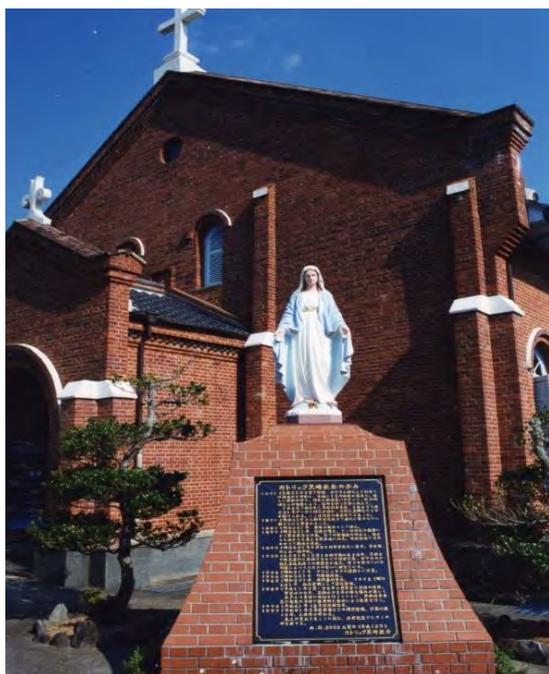
私は『沈黙』の舞台で、ロドリゴが上陸した隠れキリシタンの外海へ行った。

黒崎教会のステンド・グラスは綺麗だった。

近くにある遠藤周作文学館のテラスから見た角力灘に沈みかけている夕日は、綺麗だった。ドロ神父は布教だけでなく福祉でも活動していたが、拠点となっていた出津教会を観て帰路についた。

バス停の傍らに遠藤さんの“沈黙の碑”があった。その言葉は、心に浸みた。

“人間がこんなに哀しいのに、主よ 海があまりに碧いのです。”



黒崎教会

③、天草、島原

天草四郎を大将に、戦場経験のある元有馬家の家臣を中心としてキリシタンで結束を固めた 37,000 人が原城に立て籠り、島原の乱 が 1637 年に起きた。

宗教一揆とわれてきたがその本質は、島原藩主 松倉重政、唐津藩主寺沢堅高による想像を絶する悪政に対する農民一揆であった。

一揆勢に対抗できなくなって、松平信綱が総師となり、124,000 人に膨れ上がった。

結局、兵糧が尽き幕軍の総攻撃で落城した。凄まじい事に幕軍は、一揆勢を全て殺した。司馬さんは、“島原には何も残っていない”と書いていたので、行かなかった。

天草へは、是非行きたいと思っていた。

長崎の茂木港から富岡港までは船に乗り、それからバスを使うのだが、交通の便が悪く一回目は船が遅れてしまったのであきらめて、二回目にやっとたどり着けた。

天草が妖しくもきらびやかなキリシタン文化の象徴的存在として一挙に浮上するのは、北原白秋の詩集『邪宗門』が刊行されてからである。

与謝野寛、北原白秋、木下杢太郎、吉井勇、平野万里の 5 人の文学青年(5 足の靴)は、1907 年フランス人宣教師ガルニエ神父を大江天主堂に訪ねた。そして神父の宗教的雰囲気深く衝撃を受けた。現在の 大江天主堂は、ガルニエ神父が私財を投じて建立した。白いロマネスク様式の建築で名棟梁鉄川与助の設計施工によるものである。天主堂の前に吉井勇の歌碑がある。

“白秋とともに泊りし天草の、大江の宿は 伴天連の宿”

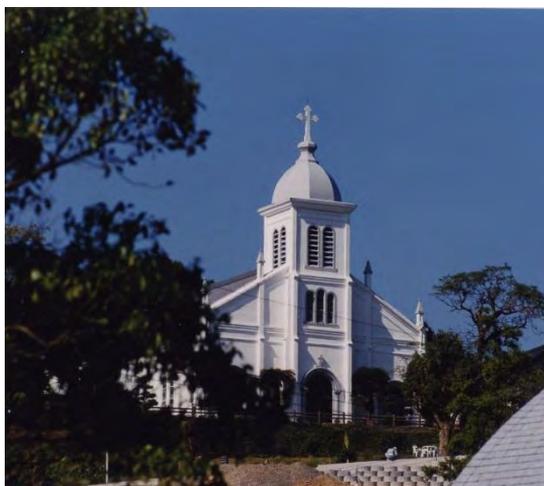
又バスに乗って海の天主堂 “崎津天主堂” へ向かった。

崎津は小さな港町である。禁教下に伝統宗教とキリスト教が共存しながら信仰を継続した潜伏キリシタンの集落として評価されている。

崎津天主堂は重厚なゴシック様式の建築で、ステンド・グラスは簡素だが美しかった。

昔、踏絵が行われた場所に祭壇が配置されている。内部は珍しく畳敷だった。

小高い丘の上に公園があって、そこから綺麗な天主堂を見下ろせた。



大江天主堂



崎津天主堂

④、リスボン(ポルトガル)

リスボンは、バスコ・ダ・ガマもザビエルも東洋に向かって船出をして行った港である。

ドイツのハノーバーで仕事を終えた後で、リスボンを訪ねる機会が得られた。

リスボンでは、ポルトガルの残照を見て大航海時代を偲びたかったし、司馬さんが楽しんだように“オリジナルの「ファド」”を聴きたかった。

- * “発見のモニュメント” はテージョ河畔に立っており、エンリケ航海王子を先頭に、航海者、学者、宣教者 達の像が希望と誇りに満ちた姿で再現されていた。
- * “ジェロニモス修道院”は、繊細なマヌエル様式の建築でその美しさは天正少年使節団を圧倒した。ハイライトは回廊の柱に施されている彫刻で、昔の栄華が偲ばれた。
- * “ベレンの塔”はバスコ・ダ・ガマ、世界一周の偉業を記念として作られた要塞であり、ジェロニモス修道院とで、世界遺産を構成している。



ジェロニモス修道院



ベレンの塔



発見のモニュメント

エンリケ王子が

バスコ・ダ・ガマ、ザビエル 等をも

統率している。



カラフルな民家



細い道を走る電車

◎ ファド

『ファド』は 1830 年頃から歌はれ始めた歌謡で、郷愁、せつなさ、やるせなさ、の情感にあふれている。過去の栄光から没落した哀しい思いが、歌全体を覆っているようだ。司馬さんは、『ファド』に興味を持たれて、日本を出る前に『ファド』を良くし行っている知人から、情報を仕入れていかれたようだ。リスボンのファドハウスで須田画伯とファドを聴かれた。3人の歌手の歌を聴き、2人は下手、1人は上手かったそうである。私は若い時から『ファド』をドラマチックに歌うアマリア・ロドリゲスのファンだった。リスボンでは、アマリア・ロドリゲスとは比べられないが、とても上手い一人の歌手の『ファド』を聴く事が出来た。日本では、ちあきなおみのファドを CD で楽しんでいる。霧笛、酔いどれ船、等。



アマリア・ロドリゲス



ファドを楽しむ
司馬さんと須田画伯

⑤、ゴア(インド)

ゴアは以前、ポルトガルの植民地で、東洋進出の拠点だった。

ザビエルは、日本から中国へ行く計画だったが、病気により途中、上三島で昇天した。

埋葬された後、肉体も祭服も腐敗が進まなかったのが、ゴアのボム・ジェズ協会に運ばれ眠って居る。10mの高さにある銀の棺に納められ、10年に1回公開される。

私はムンバイへ仕事で行った帰りに、ゴアへ行った。

ゴアは美しいビーチが散在している開放的なリゾート地。

植民地時代の教会が多く残っていて、ここはカソリックの街である。

ボム・ジェズ教会を訪ねた時ミサが行われていた。ミサの様式は標準的なカソリック。

ゴアで仲良くなったタクシー・ドライバーが、ナイト・バザールに連れて行ってくれた。

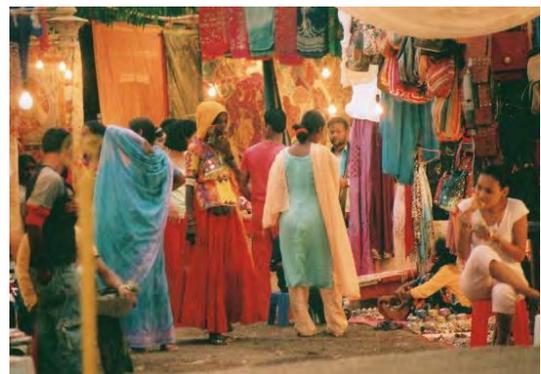
以前住んでいたヒッピーも多く集まってとても賑やか。楽しい夜を過ごすことが出来た。



ボム・ジェズ教会



ザビエルの棺



ナイト・バザール

4、アイランド 紀行

妻と二人で、2005年5月にダブリンを起点とする The Grand Atlantic Tour を利用して アイランドへの旅をした。初めて経験する事も多く、楽しかった。何故アイランドへ行ったかというと、未知の面白さへの期待だった。

(1)、アイランドの歴史と文化

アイランドは、紀元前300年頃、ヨーロッパのケルト民族の渡来で、形成された。ケルト民族は、勇猛果敢な民族でアイランドを1000年以上に亘り統治し、その言語と文化、芸術は現在のアイランドに色濃く引き継がれている。5世紀に入り、聖パトリックによりキリスト教が広められグレンダロホなどの修道院を中心として数百年に渡りアイランドの芸術、学問、文化が開花した。

① ケルズの書

『アイランドの宝』とも言われて、トリニティ大学の図書館に大切に保管されている。

聖書の写本『ケルズの書』はケルト人の修行僧によって製作された。ケルト独特の渦巻き模様や動物模様が描かれ、文字も装飾性豊かにデフォルメされている。

修行僧の祈りと贖罪が込められており、ケルト芸術とキリスト教が融合して生まれた宗教美術の傑作である。



ギリシャ文字の『キリスト』の頭文字 XPI を模様化した。マタイによる福音書の1章18節の最初のページ。

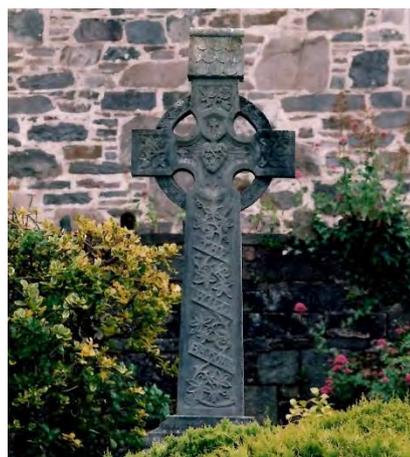


4人の福音書記者のシンボル旧約聖書に登場する動物をモチーフに象徴的に描かれている。

② ケルト十字架（ハイクロス）

十字に輪が組み合わされた独特な形をしている。

その表裏には、ケルト的な紋様とキリスト教の教義が刻み込まれている。



③ 歴史年表

432頃	聖パトリック布教のためアイルランドへ	
800頃	ケルズの書、完成、ケルト十字架の建築	
1171	ヘンリーII世、アイルランドに侵攻	
1541	イギリス、ヘンリーVIII世アイルランド王になる	
1649	清教徒革命の指導者、クロムエルが侵攻	
1801	アイルランド王国がグレートブリテン王国へ併合	
1840	オコンネルが併合撤廃協会を設立	
1845～49	ジャガイモ飢饉で移民促進 人口800万人が400万人に減少	
1868	IRB (IRA の前身) の暴動	
1916	アイルランド義勇軍によるイースター蜂起	
1919～21	アイルランド、独立戦争	
1921	アイルランドと英国、休戦同意	北アイルランドはイギリスの統治下に
1949	共和制国家、アイルランドの成立宣言されてイギリス連邦より離脱	

◎ 北アイルランド問題

殆の武力組織は武器を捨てたが、小規模な暴動は継続。

英国支配からの開放運動の歴史だった。

(2)、司馬さんのアイルランド紀行

① 司馬さんの旅、トピックス

司馬さんは、イギリスのリバプールから飛行機でダブリンに入った。

リバプールは、アイルランドからアメリカ、等へ旅立った移民が立寄った港。

遭難したタイタニックが、最後に寄港した港でもある。

司馬さんはアラン島で大きなスリルを経験した。

アラン島には大断崖がある。

司馬さんは、大断崖迄腹ばいになって進み、虚空へ首一つだけ出してみた。吸い込まれそうな高さだった。

しかし、高所恐怖症の木下秀雄氏が目をつぶり両足をおさえてくれていた。



大断崖

② 司馬さんのアイルランドに対する代表的なコメント

◎ 『アイルランドにゆきたいのは、アラン島へ行きたいからです』

アラン島は一枚の岩盤だけで、土壌が殆ど無い。風が運んできて岩の割れ目に溜まった塵を、両手ですくっては岩盤上へ置き、畑を作りジャガイモを植える

◎ ともかくも 大飢饉がアイルランド人を大量にアメリカへ送り、多くの分野で才能の華を咲かせた。

大飢饉でアイルランド人、900万人のうち100万人が餓死し、150万人がアメリカイギリス、等へ移民した。今ではアメリカのアイルランド系は4000万人。

アイリッシュ・カトリックの成功物語としてケネディ大統領、レーガン大統領が実現。

◎ アイルランド人は、客観的には、百敗の民である

が、主観的には不敗だと思っている。これはアイルランド人以外は持たない“幻想”という特殊能力が介在し、それと自己に対する崇拜心があるからである。

◎ アイルランドは特に文学においては、途方もない大国である。

スウィフト (ガリバー旅行記)、 オスカーワイルド(ドリアングレイの肖像)

J. Mシング(海へ騎りゆく人びと)、ジェイムス・ジョイス(ユリシーズ)

・ 更に4人ものノーベル文学賞受賞者

J. ヒーニー、バーナードショウ、WB イエイツ、サミュエルベケット

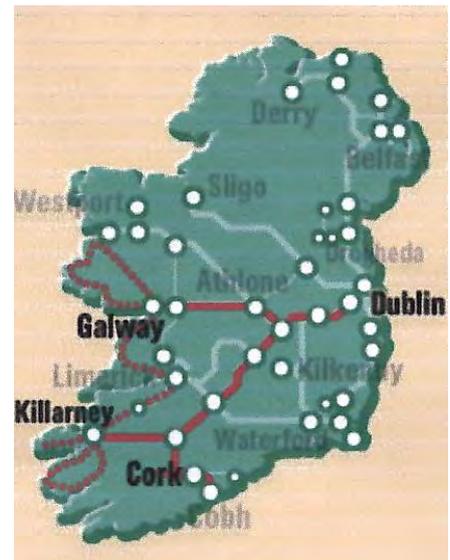
◎ キリスト教が広がるとともに、ドルイドの神々は落ちぶれて妖精になり果てた

五世紀に聖パトリックが持ち込んだキリスト教という普遍的宗教がアイルランドをヨーロッパ文明の一部にしてくれたが、土着信仰に寛大だったのでドルイドの神々は妖精になり果てた。やがて妖精は悪戯をしたり、小さな呪いをかけたり人里離れた草原で輪舞を楽しんだりするようになった。

(3) 私のアイランド旅

私共二人は、ロンドン経由でダブリンに到着し、
Temple Bar のホテルに宿泊した。
ホテルの隣は Irish Pub で、夜遅くまで賑やかだった。
翌朝未だ暗い中 7.10 発 Cork行電車に乗込んだ。
The Grand atlantic Tour の出発である。

① Blarney Castle



この城の城壁の上に Blarney Stone
があった。
その石にキスをすると『雄弁』の才能
が得られるという言伝えがある。

城近くの Blarney のレストランで昼食を採った。
そこの調理室で偶然、調理をしている婦人の姿を目撃した。
真にフェルメールの絵を見ているようだった。
思わずカメラを向けてシャッターを数回切った、又とない傑作を撮影出来た瞬間だった。



② Cobh Harbor

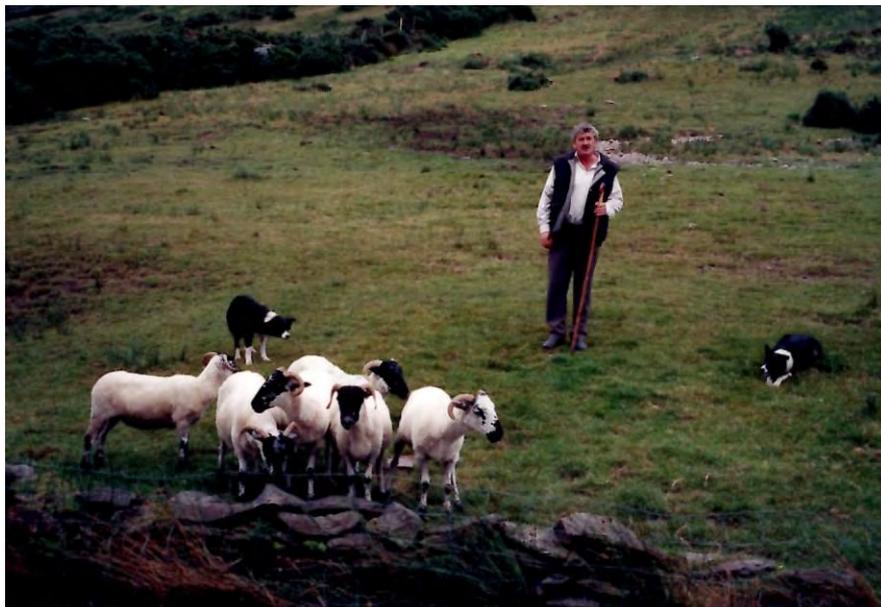
じゃがいも大飢饉に見舞われて多くのアイルランド人がアメリカ等に移民した。
この港からは、250万人の移民が船出をしていった。写真の銅像は最初にアメリカへ渡った
アン・ムーアと2人の弟である。

又この港は、遭難した Titanic号 の最終寄港地だった。



③ Ring of Kerry

海にも山にも近い半島で、その牧羊地での羊の飼育を見せてくれた。
放牧されている羊の大群は、夕方小屋に帰る。牧童と2匹の牧羊犬が、羊を
コントロールする。
牧童の合図で犬は、羊の大群(2種類の羊が混在)を小屋に向かって追立てる。
小屋の入口は近接した場所に、2ヶ所設けてある。ベテランの犬は先回りをして
小屋の入口に待ち構える。羊が近づいたら、羊種毎に夫々の入口を指示し
整理を終了する。 見事だった。



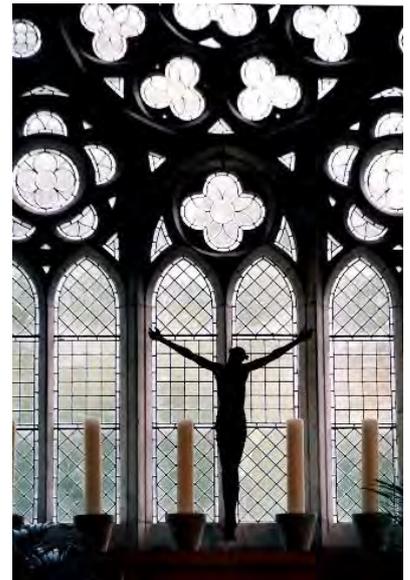
④ Cliff of Moher

高さ約200m、長さ8km で圧倒的なスケールを誇る。

司馬さんは、アラン島の大断崖で崖下を覗き込んだが、私にはその度胸がなかった。



⑤ Kylemore Abbey



人里離れた溪谷の湖面に美しい姿で立っている。

このネオ・ゴシック調の修道院は、19世紀半ばに、ミッチェルが妻へのプレゼントとして建設した建築である。

⑥ Connemara



アイルランドらしい荒々しくて、素晴らしい風景が広がっていた。

Gallway からは電車で夜遅く、ダブリンへ戻った。

⑦ Dublin

* Saint Patrick Cathedral



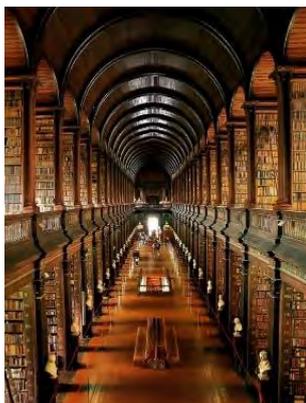
12世紀に建設された、アイルランド最大の大聖堂。

ガリバー旅行記の作者スウィフトが、晩年、司祭を務めていた。

* Trinity College

1592年にエリザベス女王1世により創設された。

20万冊の蔵書を持つ図書館では『ケルズの書』を



一日一点だけ、公開している。



5, あとがき

実際の旅をしていたのは、随分前の事だったし、司馬さんの『街道をゆく』を旅行ガイドのように使って居たわけでもない。

今回、『アイルランド紀行』を 昔の旅を思い出しながら、司馬さんの著作を読みながら、他の参考資料も見ながら 纏めてみたが、とても楽しい時を過ごすことが出来た。

体力も落ちて来て、遠くへの旅は出来なくなってきたが、今後も 写真+エッセイ (P & E) の形で仮想的な旅を楽しみたいと思っている。

◎ 参考 資料

- “街道をゆく“ 各種 司馬遼太郎
- “司馬遼太郎の風景(愛蘭土紀行) NHK スペシャル
- “司馬遼太郎が発見した日本 松本 健一 著 朝日新聞社
- 週刊 司馬遼太郎 “街道をゆく“ 各種 朝日新聞社
- アイルランドへ行きたい 深谷哲夫、リチャード・ホートン 他 新潮社
- DK Eyewitness Travel Guides IRELAND Caiman America
- 『街道をゆく』展 1998 朝日新聞社
- 『司馬遼太郎が愛した世界展』 1999 NHK
- 司馬遼太郎の街道2 愛蘭土紀行 等 朝日新聞出版
- アイルランド歴史紀行 高橋 哲雄